

古事記から学ぶ その10

邇邇芸命の登場

<1> 邇邇芸命と木花之佐久夜毘売

大国主の時代が終わり、邇邇芸命(ににぎのみこと)の時代が始まった。

●邇邇芸命が笠沙の岬を歩いている時に、ひとりの美しい乙女と出会った。名を尋ねると

「私は●大山津見神(おおやまつみのかみ)の娘で●神阿多都比売(かむあたつひめ)で、別名を木花之佐久夜毘売(このはなのさくやびめ)と申します」と、答えが返ってきた。兄弟姉妹の有無を尋ねると、「●石長比売(いわながひめ)という姉がいます」。

「お前を妻にしたい」と心中を伝えると、「父の口からご返事申し上げます」と言う。

父親である大山津見神は喜んで承諾し、結納の品も揃えてくれたのだが、「姉の石長比売も一緒に貰ってくれ」と条件を付けてきた。

ところが、妹に比べて、姉の方は醜い顔をしていたので、一目見るなり父親の元へと返してしまい、木花之佐久夜毘売と一夜を共にした。

大山津見の言い分はこうだった。「天神の御子が長く揺ぎなく続くことを願って姉の石長比売を、そして桜の花の咲き匂うように栄えるようにとの願いで妹の木花之佐久夜毘売を、それぞれ、神に誓う儀式(うけい)も行った上で差し上げました。それにも関わらず姉の方を返して妹だけを受け取ったということは、天神の御子の命といえども、桜の花が散るように脆くはかないものになるでしょう」

これまで、代々の天皇の命が長くないのは、ここから始まっていると言い伝えられている。

木花之佐久夜毘売は、間もなく出産と言う時期になると「この子は天神(あまつかみ)の御子なので、私一人の子ではありません」これを聞いた邇邇芸命は、

「この子は私の子ではなく、国神(くにつかみ)の子であろう」と返した。木花之佐久夜毘売は、

「この子が天神の子であれば無事生まれてくるでしょうが、國神の子ならば無事生まれてはこない筈」と言って、広い御殿を造って中に入り、内側から土で目張りをして火を放って、子を生んだ。

生まれてきた子は、順に●火照命(ほでのみこと) ●火須勢理命(ほすせりのみこと) ●火遠理命(ほをりのみこと)の三人だった。火照命はのちに隼人(はやびと)の祖先となった。

火遠理命は別名を天津日高日子穗穗手命(あまつひだかひこほほでのみこと)と言い、「日は高く輝き、その日の神の御子であり、稲穂が実る」ことと、「火焰の中から立ち現れた」ことを意味する。

<2> 海佐知毘古(うみさちびこ)と山佐知毘古(やまさちびこ)

兄の火照命(ほでのみこと)は海の獲物を追う海佐知毘古(うみさちびこ)として、あらゆる魚を釣るのを仕事とした。弟の火遠理命(ほをりのみこと)は山の獲物を追う山佐知毘古(やまさちびこ)として、あらゆる獣を狩るのを仕事とした。ある日、弟の火遠理命が、兄の火照命に、こう言った。

「私の狩に使う弓矢と、兄さんが釣りに使う釣鉤(つりばり)とを一つ取り換えて使ってみませんか」

兄は応じなかったが、あまりにもしつこく言うので、やむを得ずこれに応じた。

火遠理命は借りた釣鉤で魚を釣ってみたが、全く釣れず、しかも釣鉤を海の中で失くしてしまった。

事情を説明したが、兄火照命は納得しない。仕方なく、腰の十拳剣(とつかのつるぎ)を潰して、代わりの釣鉤を500本作ったのだが、「同じものを返してくれ」と言って許してくれない。

弟が困ってしまい、海辺で嘆き悲しんでいると、潮路を司る●塩椎神(しおつちのかみ)が現れた。塩椎神に問われて、火遠理命が経緯を説明すると、塩椎神は、無目勝間(まなしかつま)の小船(細い竹を編んだ籠のような船)を作って、火遠理命に乗らせてこう言った。「しばらくは流れに任せて行きなさい。そのうちに良い潮路に乗って行くと立派な宮殿が現れます、これが綿津見の神の宮殿です。門の傍らの泉のほとりにある桂の木に登って待てば、海の神の娘たちが良い考えを示してくれるでしょう」指示通り宮殿まで行き、桂の木に登って待っていると、海神(わたつみのかみ)の娘である●豊玉毘売(とよたまびめ)の侍女が水瓶を持って水を汲みに現れた。

火遠理命がその水を所望すると、玉器(たまもい)に汲んだ冷たい水を差し出した。

火遠理命はその水を飲まずに、首飾りの玉を緒から外して口に含み、器の中に吹き入れた。するとこの玉は器に張り付いてしまって取れなくなってしまったので、侍女はそのままの状態豊玉毘売に差し上げて、経緯を説明した。豊玉毘売は、門の外に出て火遠理命の姿を見るや、恋に落ちてしまった。

<3> 火遠理命(山佐知毘古)と豊玉毘売

早速父親に報告すると、父親も門外に出てその姿を確認した。

「この方は天津日高(あまつひだか)の虚空津日高(そらつひだか)の君だ。」と言って、宮殿に招き入れて、結納の品を取り揃えてもてなし、娘を妻として差し上げた。

火遠理命はこの地で三年余りの日々を過ごした。ある日、火遠理命は自分が生まれた国のことを思い出して深いため息をもらした。豊玉毘売は大層心配をして父親(海神)に相談した結果、父親は何か訳があるに違いないと感じて火遠理命に問うた。

火遠理命が、兄との間で起きた問題の一部始終を説明すると、海神(わたつみ)は海の中のあらゆる魚を呼び集めて、「釣鉤を取った魚がないか」と問いかけた。すると、「鯛が喉にとげが刺さって物が食べられないと言っているので、おそらくこの者が取ったのでしょう」と答えが返ってきた。

綿津見神が鯛の喉を調べたら、案の定釣鉤が出てきたので、きれいに洗い清めて火遠理命に手渡し、釣鉤を兄に返す時に呪いの言葉を呟くように示唆した。

「この鉤はふさぎ鉤、せっかち鉤、貧乏鉤、愚か鉤」と呪いの言葉を呟きながら、後ろ手に相手を嫌って渡すようにと言い、「もし兄が高い所に田を作るなら、あなたは低い所に作りなさい。逆になったら、こちらも逆にしなさい。私は水を司っている。三年もすれば兄は貧しくなるだろう。もし兄が恨んで攻めてくるようなことがあったら、塩盈珠(しおみつたま)を出して溺れさせ、もし憐れみを請うてくるなら、塩乾珠(しおひたま)を出して助け、これを繰り返して懲らしめてあげなさい」

(*註:塩盈珠は満潮を操り、塩乾珠は干潮を操るもので潮の満ち干を意味している)

そして、海に棲むワニを集めて、火遠理命が本国に帰る道を同道する者を募った結果、長さ一尋(ひとひろ)の一尋和邇(ひとひろわに)が、一日で無事送り届けて戻ってくることを約束して引き受けた。

かくして、火遠理命はワニの背中に載せられて帰宅することができた。火遠理命は、ワニに褒美として身につけていた紐の付いた小刀を首にかけて帰してやった。

このワニは、今でも刃物を持つ神として●佐比持神(さひもちのかみ)と言っている。

火遠理命は海神からの助言通りの手順で、釣鉤を兄に手渡した。兄の反応は予想通りだったので、助言に従って塩盈珠と塩乾珠を駆使して沈静化した。

その結果、兄は服従を誓って、「宮殿の守護役」を引き受けた。兄火照命はのちに隼人(はやびと)の祖先となるのだが、隼人が常に朝廷に仕えているのは、この出来事に端を発していると言われている。

ある日、海神(わたつみ)の娘豊玉毘売は、夫である天津日高日子穗穗手命を訪れてこう言った。

「私は身ごもっていましたが、今日が生まれる日です。天神(あまつかみ)の子を生むのに海の中では

